

「未来」

呼ばれたので、答える。呼ばれることは分っていた。どんな用件かも。未来という名は、随分、皮肉だと思う。私の名前を考える時、両親は、どんなに悩んだ事だろう。或は、パツと辞書を抜いて決めたのかもしれない。私には、分らない。想像することしかできない。

「はい」

央伍君に、答える。央伍君は緊張した、真剣な、顔をしている。かわいい顔。ずっと思い絵描いて来た。愛しいと思った。いつも戯けてばかりの彼が、初めて、私に見せた態度。私は応えたくて、言おうとしたけど、喉が震えてうまく喋舌れなかった。

「好きです」

央伍君は言う。映像がぼやけて重なる。嬉しい。有難う。言葉は震えて分解される。涙が出て来た。しゃくり上げてしゃべれない。頭が熱くなって、ぼうつとして、倒れそうに思う。「大丈夫か」央伍君が支えてくれた。意識が空に舞う。こんなに男の人が近くに居ることは、二度とない。私はゆっくり、「大丈夫」と言って離れた。呼吸を整える。大丈夫。口に出した言葉を、頭の中でくり返す。大丈夫。涙が出るけど大丈夫。

「ごめんなさい」

断わりの文句を何度も思い出す。言ったそばから流れていった。もういまは、なんと続けたのか思い出せない。央伍君の表情も、い

まはもう思い出せない。

涙を枕に押しつけて、どれぐらい経ったかわからない。涙に暮れることは、分^{わか}っていた。しかし、気もちに一段落がつくと、なぜ泣いていたのか思い出せない。自分がこの先これ程泣くことは二度とない。頬の皮膚が一度濡れて乾燥した引き攣^つる様な感覚を抱えながら、机へ向った。昨日書いた日記を目繰^{めく}る。

×月○日 央伍君^{おうご}に告白される日！ 本当に嬉しい。央伍君^{おうご}、かわいい顔してる。呼び出すのが、校舎の裏つて、まんがとかみたい。今からドキドキして、やまない。恥^はずかしくて、心地いい。

読んで心臓が跳ね回るほど驚^{おど}ろいた。私が、央伍君^{おうご}に、告白された？ 状況が理解できない。夫^そりゃあ好きだけど、あれ、でも、好きなのは私で、もう少し先じゃないの？ 混乱して何を思っているのか分らない。嬉しさと、困惑で、一杯になる。そうか、告白されたんだ、あれ、でも、困る。どうしたら、いいんだろう。日記の続きを読む。

でも、私、断わるんだ。そっか、しょうが、ないのかな。嫌だよ嫌だけど、しょうがないもんね。怖い。

私には過去が分らない。みんながいう所の、「記憶」が私にはない。私には未来が見える。自分にこの先何があつて、どうやって死ぬのかまでの未来が。愛里^{あいり}は「怖くないの」と言った。「私、自分が死ぬなんて想像もできないよ。今高校生で、平均的な寿命で言ったらま

だ何十年も何十年もある訳でしょ。正直自分は死なないって気がしてるもん」愛里は冗談を言った時の様に、笑った。冗談なのか、本気なのか、分らない。私には彼女の感覚が分らない。記憶があるというのは、過去が見えるということは、平生生きていく上でどのような感情を起させるものなのだろうか。私は言った。

「小さな頃から死ぬ時のこと知ってる筈だからね、慣れちゃってるんじゃないかな。怖いっていうか、しようがないって感じなのか」

日記にはその時のやり取りが詳細に記してある。私には、其日あった出来事を思い返して綴ることが出来ないのです、明日のことを書く様にしている。明日何があるか。過去があっても記憶のない私は、この日記や、友人の話を手懸に過去を知る事しか出来ない。

断わった事を知ったら涙が出て来た。目尻を押えたら、濡れた跡があつて、自分が泣いていた事を知る。たまらなくなつて日記を破ろうとした。破いてぐちゃぐちゃにして踏み付けてもう二度と知ることのないように。心で悲鳴を上げた。破ろうとして、結局自分が破れないことを知っているのです、虚しい憤ろしい気もちで乱暴に机に叩き付ける。

「きのうテレビ見た」

「見た見た。超かっこよかったよね」

学校でそんな声をきく。私が今日見るテレビの話なら、できるのになあ。そんなことを思う。もしかして同じことをもう何度も思ったのだろうか。みんなは、面白かったテレビや映画を、何度も思い出して味うのだろうか。考えていると声が掛る。

「未来」

金子君だった。顔を上げると、央伍君もいる。央伍君！頭に血が上って、クラクラする。これが好きっていう気もちだろうか。まともに顔が見れない。

「明日大事な一戦があるんだよ。おれの競馬人生が懸ってるんだ。な、頼むから、なにが勝つのか教えてくれ」

「だめ」恥しきから大仰に外方を向く。「私は私の興味あることしか分らないんだから。競馬の結果なんて今日も明日も目にしません。代りに、今日のニュースなら教えて上げるよ」

「それじゃあ意味ないんだよなあ」

金子君は大きな声を出した。大袈裟な身振りに、笑いが起る。私も笑ったが、央伍君は笑っていないなかった。「どうしたの」声を掛けると、強張った、怖い顔をする。実際に目にとするととても怖くて、驚いて、心臓を握り締められる。どうしたんだろう、私、何かした？考える間もなく、「悪い」というと教室を出て行つた。

金子君が息を吐いた。愛里が「ねえ」と私に言う。言おうとしてやめるので、不安になる。「私、何かした？」愛里は首を振った。

「しようがないことだよ」

声には諦らめの調子が籠っていた。家に帰ったら、日記を見てみようと思う。でも、見たって、其内容を覚えていられない。愛里がなにか言いたそうな、悲しい顔をしているのも、すぐに忘れる。

金子君の隣りに、めずらしく央伍君がいない。

○月○日 いまは夏休み。いつから夏休みが始まったのかは分らないけど、いつ終わるのかは分る。宿題をやる必要はないだろう。

明日は愛里と遊ぶ最後の日。私の記憶には、もう、明日を境に愛里が出て来ない。明日愛里と別れたら、私は愛里を忘れるだろう。

う。愛里と何をしたのか、して来たのかは思い出せないけれど、愛里のことを好きって気もちは、嘘じゃない。気もちは、積み重ねられて来たものだと思じる。でも、信じたことも、思い出せないんだろうなあ。

日記を読み返すと、愛里と出会う前日、めっちゃめっちゃ長く日記を書いていて笑う。興奮して、「明日は親友と出会う日！」だって。きつとずっと前から、愛里と出会う日を夢に見て、楽しみにしていたんだろうなあ。「これからたくさん楽しいことが二人を待ってる」だって。絵とかも書いてて、この頃は若かったなああって感じ。いまは、なんだか、おばあさんになった気分。

けんかした時のことも書いてある。「運命は切り関くものだよ！未来が決まったたって、そんなの、従がうだけなんてつまんないじゃん。もっと自由に生きてよ！」読み返しても、意味が、よく掴めない。運命を切り関く。じゃあ、その、切り関くことも運命の一部なのだとしたら、どうなんだろう。一體どう生きれば自由と号べるのだろう。私には未来が見える。夫は、抗拒い様のない、真実に思える。

楽しみなこともある。恐ろしいこともある。でもそれはいつか辿り着く途だから、しょうがない。楽しみなことがある。それだけで、私は、嬉しい。

明日の愛里とのデートを、何度も思い返す。二人が笑って別れるのが、しあわせで堪らない。愛里の笑顔が、好き。愛里のことが大好き。今までありがとう。本当に本当にありがとう。このありがとうの気もちを、私は忘れるけど、今はここにある。私だけのもの。明日、全部渡すから、二人のものにしようね。

明るい未来が見える。楽しくて、胸が躍る。服を選ぶ。着ていく服は分っているけど、どれを着ていこうか、悩む。この服かわいいからお気に入り、これだと気合入りすぎ？ 部屋にはたくさん服が乱れていて、自分がどれほどの時間悩んでいたのか、知る。

時間が迫って来た。慌ててお気に入り服を着る。よしかわいいぞと思いつけて、それは調子に乗り過ぎかなと思う。でも、悪くない。化粧を、ふるえる手で丁寧にして、髪を調える。心臓が、踊って歇まない。怖い。でも嬉しい。今日は央伍君に会える。街で、偶然にだけけれど、私は其偶然を知ってる。

出掛けた。CDショップや、服屋を、見て回るけれど身が入らない。お腹は減ってない。きつと、家で済まして来たのだろう。ハミガキは、大丈夫だろうな。いい匂いのするガムを食べる。央伍君に会う直前で、ちゃんと捨てるから、大丈夫。大丈夫、大丈夫。自分に言い聞かせる。ドキドキが止まらない。これからのことを思い出し、想像する。身悶えするような恥ずかしさに襲われる。想像するのは、すてきなこと。没頭していると、幸せでいられる。

ガムを紙にくるんで、ゴミ箱に捨てた。一、二、三と、自分の一歩々々を数える。もうすぐ、もうすぐ彼に出会う。にやける顔を、咳払いする伴で、隠す。なるべく、いい顔をしていなくっちゃ。自分の記憶では、自分の顔は分らない。ただ景色だけが見える。央伍君。私の世界が央伍君だけで染まる。世界と、現実が、少しずつ重なる。人込の中に、央伍君の姿が、見えた。

「央伍君！」

大声で叫んだ。自分がこうすることは分っていた。でも、こんなに恥ずかしいとは思わなくって、頭に血が上った。央伍君以外の人までこつちを見る。私は周りにペコペコ頭を下げながら、赧れ隠しに笑

った。

「今何するところ？」

央伍君も恥しそうにポリポリと鼻を搔いた。「買い物だよ」目を合せずに言う仕草が、可愛い。

「久しぶりだな」

央伍君は「夏休み始まってから会ってないな」と続けた。私はエヘへと笑う。央伍君がそう言うから、そうなのだろう。何をやってるんだ私。腑甲斐なさに、憤りを感じる。「未来は何をしてんだ」言われて、きよろきよろする。袋を持っていた。「えーと、買い物？」袋を掲げて首を傾げる。「そうだったな」央伍君はゆっくり頷突いて応じた。

気付いたら二人で歩いていた。「あれ、どこ行くところ」思わず聞いた。「川」央伍君は笑う。「それ三回目」私はしまったと思う。「あ、申し訳ない」「いいんだ、笑ってごめんな」央伍君は笑みを深める。何をやっているんだ私。でも、笑ってくれたから、いいかな。央伍君の笑顔に見惚れる。

ベンチに座って川を見る。この時が、永遠に続けばいいのにな。続かないことを、私は、知っている。「永遠ってあるのかな」私は独語く。メルヘンチックな子と思われなかなという狙いが無いではない。「この世のどこかにさ」

「ないとは言えないよな。あるっていう証明はないかも知れないけど、ないっていう証明もないんだから、だれにも分らない。だったら信じてみてもいいじゃんって、俺れは思うけど」

少なくとも、私に永遠は訪れない。

「お前は覚えてないかも知れないけど、球技大会で、サッカーやったじゃん、クラス対抗で。うちのクラス、サッカー部が揃ってる

二組に勝ってさ、すげえ盛り上ってたんだよ。こうなりや絶対優勝だつて、みんな一つになつてた。でも、決勝で、PKになつてさ、俺れが外した所為で、負けちまったんだよな。俺れすげえ落ち込んだよ。みんなお前の所為じゃないつて言ってくれたけど、どう考えたつて俺れが悪いじゃん。俺れ、いじけて、みんなの顔見てられなくて、校舎の裏に逃げ込んだよ。涙が出そうだった。そしたら、未来が、走って来てさ、なんて言ったと思う？ 『央伍君、未来を見ようよ！』だつて。俺れ、自分がいじけて、うじうじ失敗に囚われてるのが馬鹿々々しくなったよ。だから又すぐみんなのとこ行って、もう一回ちゃんと謝つて、みんな許してくれた。お前の御蔭なんだよ。俺れは馬鹿だから時々あのPKのこと思い出して未だに身悶えすることあるけど、そういう時は、未来のこと、これからのこと考えるようにしてる。あ、だから、ごめんな。未来には本当に感謝してるんだよ。でもお前に失恋してから、なんか気まずくつて、女々しいつていうか、未練がましい様な気はするんだけど、どうしても顔見て話しできなくて……」

「え、一寸、待つて」耳を疑がった。「私に、失恋れてつて、私が、央伍君を、つまり……」

「失恋れた」央伍君は頷突いた。「つて何で俺れが説明しなきゃいけないんだよ。つて言つてもしょうがないのか、嗚乎、もう、はずかしい……」

「そんな訳ない」私は混乱して口走った。

「だつて、私が、央伍君のこと」

「好き」

遠くで野球に興ずる少年達の声が響いた。烏が阿呆の様な声で鳴く。川が夕焼けでオレンジに映える。私の顔にも映えていればいい

など思う。飛んでもない事をしていと思う。情景は分つても、気持ち迄は、分らない。想像するしかない。想像は、現実に、及ばない。劇烈に恥かしい。顔が真っ赤になっていたらどうしよう。央伍君が立って動いた。

立って、屈んで、座る私の目の前に来る。かつこいい。夕陽に染まると尚かつこいい。口を披いた。

「俺はお前が好きだ。自分が、特殊な状態で生れても、卑屈にならずに、明るくて、優しい、未来のことが好きだ。お前のこと、守りたいと思う。だれか悪く言う奴とか、沢山のつらいこととかから、全部、俺が守りたいと思ってる」

私の凡ては奪われた。明日死ぬことも、忘れた。私は頷突いていた。

二人で川沿いの道を帰った。控え目につないだ手が、温かかった。沸騰した頭に、しあわせの感触、夫が私の凡てだ。

きっと生れた時から、死ぬ事が分っていた。死生観なんて言葉を見ると、馬鹿らしく思った。死ぬ時のことが分らないから、そんな事を考えるのか、単に暇だから其んな事を考えるのか、疑がった。

死は事実だ。厳然たる真実だ。生命の始まりは生れた時だけれど、人間の思考は、死を基準に出立すべきだ。未来を見れば、死しかない。どんな経過を辿るかは問題ではない。学び、働らき、食べ、寝る。一つ一つのこと死につながっている。今死なない、死ぬことのできない人間は、今、生きていくこと以外に、生きる方法はない。私は服を選んだ。ボタンを締める手に、力が入らない。出掛ける。メールを見返すと、差出人に「央伍君」と書いてあって、「今日はありがとう。本当に、本当にうれしい。こんなに明日が待ち遠しかつ

たことってない」という内容が長々と書いてあった。携帯を閉じる。電車の震動に、人々のむれ。

どうしてここにいるんだろう。電車を降り、駅前の広場に立つと、そんな疑問が胸に萌した。今日、ここには、無表情な、気もちの悪い顔をした、兇刃ナイフを振り回す男がやって来る。私の知る限り、あのひと、あの子が、刺される。次は私だ。あの二人も、私と同じ、空虚な、気もちなんだろう。女の子は電話をしながら楽し気に喋舌しゃべる。時計を見る。十時の三十分前だ。思っ、なぜ、九時半だと思わなかったんだらうと怪しむ。わからない。携帯を披ひらく。閉じる。無意義な動作をくり返す。

どうしてここにいるんだろう。何の為に、生うまれて、来たんだらう。長い、長い、時間をすごす。時計を見る。十時には、まだ、まだ、至らない。思っ、どうして、十時を基準きざんにしているんだらう、怪しむ。死ぬ為に生れて来た。その為に、長い、長い時間？

手の中の、携帯電話が、震えて鳴った。同時に、大きな、悲鳴が聞きこえた。人々が一斉にそつちを見る。逃げる人、立ち竦すくむ人、分れる。人込ひといひの隙間に、見慣れた男が、現れる。涙が迸とばしった。嫌だ、怖い、助けて。手の中で、震える携帯電話が、感情を攪かき乱す。助けて。逃げる、あの人、背中を刺される。あの子が、携帯を取り落おとして、腹を刺される。嫌だ、嫌だ、何の為に？ 目が合った。助けて。

イメージと、現実が、重なる。